

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(25点)

食事にはマナーがある。とはいえ、よく知られているように、文化に応じてその※ディテールは多様であり、しかも対立することも多い。食器をもつていいか、音をたてていいか、会話すべきか等々、際限ない。

重要なのは、マナーの具体的内容ではない。それぞれの文化において、複数のひとびとのあいだで、何がよくて何が悪いかということがすでにある。それは、複数のひとびとが、互いの行為を見あい、聞きあい、触れあっているということからくる事実である。

一人で食事をする場合、一切のマナーを無視して食べているひともいるかもしれない。

ひとと一緒に食べる場合、食べる量や速度を他のひとにあわせなければならぬ分、①それで気苦労は増える。一定量の食料しかないとき、ひとは分けあわざるを得ないわけだが、だれがどれだけを取るか——そこには、さらに緊張が走る。

ケモノたちのように食料を巡って闘争するのは、全員にとって不利益である。勝ったものが一人で多く食べるにせよ、急いで用心しながら食べるため、満足度はその量には比例しないだろう。適切に分配されれば安心感があって、量が多かっただけよりも満足度は大きいだろう。一緒に食べる場合に量や速度をあわせることは、安心を増やし、気遣いを減らす。

②正しいマナーを教えようとするひとは、マナーを知らないひとや、マナーを修正しようとしないうひとにもまして避けるべきである。そのようなひとは、マナーを語る際のマナーを知らない——マナーの正しさは、ルールの正しさとは異なるのである。

なるほどそのひとの教えは、マナーを知って相手に失礼のないようにしようという姿勢のひとには役に立つと思われようが、そもそもそうした知識によって失礼がないようにすることができると考え

ること自体が失礼である。

マナーは、ただひとの真似をするようなものではないし、覚えておいて自分がセレブであるかのように見せかけるためのものでもない。マナーとは、理由はともあれ、その場で相手のやり方にあわせようとするのであって、文化が異なれば相手のマナーも異なることを互いに前提して伝えあおうとするコミュニケーションのこ

ともである。

重要なのは、マナーをルールとして覚えることではなく、マナーの違うひとをマナーが乏しいひとと取り違えないようにすることである。マナーが乏しいひとは、自分のマナーばかりに執着するひとと同様、一緒に生活や仕事のできないひとであるから遠ざかった方がよいが、マナーが異なっているひとも、それをみずから修正しようとするひととなら、かえって愉快的な生活や創造的な仕事ができるだろう。

特定のマナーを知っているかどうかは二義的であり、マナーをもっており、かつ相手のマナーがあることも尊重して、それにあわせようとするのが最大のマナーなのである。

したがって、徳はマナーにある。マナーの基準は美醜である。「汚いこと」はしたくないように、正義は美しく不正は醜い。したがって、マナーというものは、それにのっとっていないひとがいたとしても、そのようなひとを非難するようなものではなく、「ノーブレス・オブリッジ(高貴なひとの義務)」として、むしろのっとっているひとを賞賛すべきものである。

たとえば、対向車や周囲の車の動きを微妙に感じとりながら、危険を回避しつつ澱みなく運転するということをしないひとは、マナーがないというよりは、車を運転する周囲のひとへの感受性や、そのひとたちの運転の仕方にあわせる技量がないのである。マナーの欠如は、マナーの否定や無視ということではなく、感受性や技量が

不足しているともいえる。

それでも、それを「見える化」して、すべてルールとして明快に規定せよと主張するひとも出てくるであろう。そのことは、自動車は道路の左側を通行すべきであるとするようなものである。それは道路交通法という「ルール」によるものではないかと思われるであろうが、そもそもどちらかに決めておかないと自動車は正面衝突してしまう。江戸時代、武士が刀の鞘がふれあわないようにと左側通行をしていたマナーのように、その意味では、道路交通法は、マナーを明文化したものであるといえる。

しかし、③一旦ルールが決まったとなると、別のことがはじまってしまう。

シルバーシートが設定されて以来、「年寄りにはシルバーシートに行け」という若者や、「若者はシルバーシートに座るな」という年寄りが出てきた。そのわけは、それがルールと解されたからであって、「ルールに反していること」が気になるようになることも、ルールに反しても構わないと考えているひとがいるという想像だけで、怒りという別の情念が生じるようになったからである。

そのような情念は、体の弱いひとには席を譲ろうという、従来のマナーには伴ってはいなかったはずである。マナーに反するひとへの、ただマナーに反しているからという怒りは理不尽であり、そこには I。

ルール化されたマナーは、マナーとはあきらかに異なっている。ひととおなじようにしていれば、食物を得られたり、危険を避けたりすることが多いのだが、ルールとなればその利害損得を考えはじめ、その瞬間に、そのひとはマナーを外れてしまう。それは、ちょうど、善をなしたひとが、それを口に出した瞬間に「偽善」、すなわちひとから評価されるためにそれをしたということになってしまふのと同様である。

さらには、たとえばトイレに行列を作るといふルールが定められたとしたら、それは、割り込みをすれば他のひとよりも早くトイレが使えるという新たな行動を可能にする。ルールが言葉で明確にされた分、その反対のことも明確にされてしまい、マナーとしてはなすべきではなかったことをしようとするひとたちが出現する。

「ルールは破るためにある」というひともいるように、ルールができれば抜け道を探すひと、そのグレーゾーンを活用するひとが出てくるし、そのルールを前提に新たな行為を企てようとするひとも出てくる。それを避けるためにあえて表現の曖昧なルールが定められるとすれば、それはどんな行為なのかの解釈が分かれ、いよいよ他のひとに、それぞれの都合や心情で、非難したりしなかったりするといふ、想定外の行為を生みだしてしまう。

④ルールとは、厳密に定義しようと、あえて曖昧に定義しようと、必ず弊害が生じるという扱いにくいものなのである。

そのわけは、ほかでもない。ルールが言葉で制定されるからである。ルールは、マナーのように曖昧だったり内容が変動したりしないように、言葉によって明示されるが、その明示のための言語のルールが別途にあつて、それで二重化されてしまう。言葉によってたてられたルールは、言葉の適用についてのルールによって、もはや、単にマナーを明示したのではなくなってしまうからなのである。

(注) ※ディテール……詳細。細部。
(船木 亨著『現代思想講義』による。一部省略がある。)

問1 ①それで気苦労は増える。とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 配分を平等にするか、条件によって不平等にするかということに、苦心するから。

イ 一緒に食べる相手が何を食べているのかが気になって、安心

